

藤並の森

vol.89
2020.6

リレー隨筆

「主役」
"ウルトラマンになつた男"古谷 敏^{ビン}

ウルトラマンと古谷敏さん

「ビンちゃん、主役だよ！今度のテレビ映画の主役に抜擢されたよ。」

五十四年前に円谷プロの担当者が僕に伝えてくれた。僕はその頃、東宝映画の専属俳優でした。難関を突破して、第十五期ニューフェイスに合格して、「子供の頃からの夢。」憧れの東宝撮影所に入所しました。

メロドラマ映画のスターを目指して勉強の最中でした。俳優は誰でも「主役」という言葉をいつも待っています。一番嬉しい瞬間です。そして空想しますどんな映画なのか、ストーリーは、相手役は誰か、映画がヒットしたら当たらなかつたら、そんなことを考えながら心わくわくしていました。

だが、現実は違っていた。

「宇宙人のぬいぐるみの中に入る仕事だった」

顔の出ない主役なんて、そんなのは考えられなかつた。ばかりにしないでよ。すぐに断りました。

でも引受けた破目になつてしまいましました。

「それがウルトラマンだった。」

巨大キャラクターのカラーテレビ映画だった。色々な準備が済んで特撮の現場に入りました。「過酷で危険な現場で恐怖をおぼえました。」

毎日、打撲や捻挫突指、もつとも恐ろしい事はスース、仮面を付けて水に入る事、火薬やガソリンを使う火のシーン、何回も死にそうになつた命がけでした。我慢に我慢をした。現場の皆は自分の仕事に一生懸命に取りこんでいました。子供番組だからといって手を抜いていませんでした。素晴らしいチームワークでした。

「古谷くん、ウルトラマンは子供撮影の始まる頃、円谷英二監督の指導が有りました。」

「古谷くん、ウルトラマンは子供に夢を与えてあげるんだよ。そういう気持ちで演技する様にね。」

この言葉を大切にして、子供達のために死に物ぐるいで仕事をしました。39本の平均視聴率が36.8%でした。当時はすごい記録だそうです。僕は今「ウルトラ巡礼の旅」。各地から招かれて、講演会、トークショー、ディナーショーをやっています。そして、世界各国から声がかかります。

アメリカの都市、メキシコ、ペルー、ブラジルのコンベンションから、ゲスト俳優として依頼が来ます。日本を代表として、日本の文化でもある特撮やウルトラマンの話をするト、ファンの人達は大喜びです。ウルトラマンやゴジラのファンが沢山います。世界のウルトラマンです。あらためてすごいなと思いました。

本には有りますが。

ウルトラシリーズを見て育つた子供には自分が見つけた夢を実現した人が沢山います。「女性医師」「パイロット」「科学者」まだまだあります。夢を叶えた人達に僕はお逢いします。皆いい顔してました。夢は絶対にあきらめないように、いつか叶う時が来ます。

僕の人生が終わつたらウルトラマンが来てくれる、そして一緒にM78星雲に行きます。

(俳優)

シンデレラ展

～語り継がれる幸せの魔法～

⚠️ シンデレラ展は来春以降に延期になりました

今春の企画展「シンデレラ展」
語り継がれる幸せの魔法」が、コ
ロナウイルスの感染拡大防止のた
め、中止となりました。しかし、来
春以降に「シンデレラ展」を改めて
開催できるよう、現在鋭意努力中
なので、皆様には今しばらくお待
ちいただければと思います。

それでは、いつか開催されるシ
ンデレラ展を先取りする形で、そ
の魅力をご紹介します。

シンデレラは古代エジプトのお
話「ロドピスの靴」が最も古いもの
であるとされ、長い間人々に愛さ
れてきました。私たちがよく知る
ペローやグリムによるシンデレラ
以外にも、シンデレラの類話は世
界中に広がっています。

シンデレラには決まつた物語の
枠組みがあるのですが、その上で、
語る作家たちが様々なメッセージ
を込めています。むしろ、枠組みが
同じであるからこそ、多くの情報

時代に流行したファッショングや文
化など、様々な切り口から物語を
味わえます。

たとえば16世紀のペローが書いた「サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴」では、許しを請う義姉に
対し、貴族との結婚を世話するシン
デレラの心の優しさが書かれます。
一方でグリムの「灰かぶり」では、姉
はハトに目をくりぬかれるという
罰が与えられます。また日本には坪内逍遙が書いたシンデレラ
「おしん物語」がありますが、主人公のおしんはくやしがる義姉
妹に遠慮し園遊会に行かないなど、日本人の美德とされた謙譲
の精神を發揮しています。



ロドピスの靴紹介記事
イギリス/1887年(個人蔵)



グリム版シンデレラの切り抜き
絵:Elenore Plaisted Abbott/
アメリカ/1920年代(個人蔵)



坪内逍遙「おしん物語」/1900年
(個人蔵)

が読み取れるかもしません。
企画展ではシンデレラの歴史や
類話、各国のシンデレラの絵本に
加え、ドレスや靴などのファッ
ションや食事など異なる切り口か
らもシンデレラの魅力を紹介する
予定です。

来春以降に開催の「シンデレラ
展」を、どうぞお楽しみに！

(学芸課／川島楳子)

ULTRAMAN
ウルトラヒーロー

空想特撮大作戦

～ウルトラマンと夢見る未来～

令和2年 7/4(土)～9/6(日)

午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)



©円谷プロ

「もし明日、自分の街に宇宙人が現れたらどうする…？」

このような空想を、誰もが一度はしたことがあるのではないでしょうか。

現実には起こりえない事を考へる「空想」は、思考力・判断力・表現力を育む我々の大切な能力であり、創作の原点ともいえます。

昭和41（1966）年、空想の翼を存分に広げ、現実に起こっているかのように映像化し、日本中を熱狂させたテレビ番組が誕生しました。作つたのは特撮の神様・円谷英二氏が率いる円谷プロダクション（以下・円谷プロ）。主役となつた銀色のヒーローは、地球を守る戦いのなか

で私達に「勇気」「希望」「思いやり」を教えてくれ、今でも世界中で親子3世代にわたり愛され続けています。

この夏、高知県立文学館は、円谷プロ協力のもと【空想特撮シリーズ】と銘打たれた『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』の3作品をベースにした体感型の展示で「空想する楽しさ」を紹介します。

■ウルトラ世界へのパスポート

会場では観覧チケット一枚につき一冊、本展オリジナルの「空想特撮手帳（仮）」をお渡しします。

様々な切り口で自分の感じた事をメモできるようになつており、空想力を育むパスポートとして活用

いただけます。

■資料で楽しむ特撮の歴史

前例も教科書もなかつた“特撮”的世界。「観ている人に驚きを与えて、その驚きを糧に平和や愛を願う優しさを、そして未来に向かう希望を育んでもらいたい。」と願う円谷英二氏のもと、寝る間も惜しんで映像表現を追求したスタッフたち。

「空想」を形にするための第一歩となる世界を、ジオラマ、脚本、小道具、写真パネルなどでご紹介します。「想像」が「創造」に変わる空間になります。

■進め未来へ！

■光の国と子どもたちとのメッセージ

ウルトラヒーローが作品を通して届けてくれたメッセージとともに子どもたちが、そして私たちが再び未来に夢を描くための参加型コーナーです。

未来に不安を感じる昨今、ぜひ観ていただきたい展示として鋭意準備を進めています。

今もなお、新鮮な驚きあふれる【空想特撮シリーズ】の世界で、空想の面白さ・ワクワク感をご体験ください。

常設展虫めがね

シリーズで変わる
常設展をご紹介！

古典文学・近世文学コーナー
鹿持雅澄から中山高陽へ(没後)

口山高陽文

中山高陽は 1717(享保2)年に
富商の子として高知市堺町に生まれ
ました。画家・彭城百川に学び、同門に
与謝蕪村や池大雅がいます。南画師で
なく文人であろうと志し、詩や書画に
精励しました。

〇年記念！

か選ひ東江が書した序文が見られま
す。また、高陽没後には彼の墓銘を金
戒が翼び、東工が書いた。

中山高陽は、1771年(享保2)年に富商の子として高知市堺町に生まれました。画家・彭城百川に学び、同門こ

山川道里
東洋方言

56歳の時、江戸の寓居が火事に遭
い焼失、難を逃れるという名目で奥
羽への旅に出ます。二本松・仙台・象

高陽が41歳の時、土佐藩主・山内豊敷の命を受け、書と詩を献上。豊敷から

は文学への深い造詣を評価され、名字
帯刀やお目見えを許されるようにな
りました。展示では、豊敷の短冊「郭公
何方」等2点をご覧いただけます。

翌年、京摂を経て江戸入り。江戸では、のちに詩書画三絶と称された詩人・井上金峨と書家・沢田東江と出会い、親交を深めました。中国の人物や花鳥などの画材の変遷や流派について述べた画論書『画譚雞肋』がたけいろうには金峨



展示の様子

このほか、高陽が好んだ蘇東坡の拓本軸や、初公開となる高陽書・扇面(若尾瀬水旧蔵「寸裂錦」に収載)もご覧いただけます。

威にこだわらず親しい友人たちと酒を酌み交わすことを愛した高陽の心が伝わってきます。

は、60歳で志してから約2年の歳月を経て出版に至ったものでした。300余りの詩が収められていますが、中でも「醉歌」や「雜言」からは、高尚な生活の中で愚を守り、地立や確

は、「奥游日録」と60歳の時の療養紀行「熱海紀行」が収載されています。高陽は生前、唯一の詩集「高陽山人詩稿」を出版しています。この作品

渴などを訪れ、紀行「奥游日録」として綴りました。『中山高陽紀行集』に

56歳の時、江戸の寓居が火事に遭
い焼失、難を逃れるという名目で奥
羽への旅に出ます。二本松・仙台・象

か選び、東江が書した序文が見られました。また、高陽没後には彼の墓銘を金

雑誌で特集が組まれるなど、幅広い世代に人気の画家ヒグチユウコさん。彼女自身初めての大規模個展となる

「ヒグチユウコ展
CIRCUS」を開催しました。

印象的でした。

じめ、ヒグチさんが
各会場のために描
いたインビジュアルの原
作家の今井昌代さん
る立体作品など、
る展示作品で埋め
ました。ヒトやネコ、
ものたちの作品の
からは「ヒグチさん
ノッチから作品への
どの感想が寄せら
の圧倒的な世界觀
にける展覧会であつ
今、あらためて感じ

さらに、本展では、高知ならではの展示として、ヒグチさんが長年ファンだという幕末土佐の絵師・金蔵を紹介する「絵金蔵紹介コーナー」を設けました。これは、絵金蔵運営委員会の協力により実現できたもので、ヒグチさんが選んだお気に入りの作品を中心に紹介・展示方法についても、ロウソクに模した灯りを使うなどお客様に絵金祭りの雰囲気を楽しんでいただけるよう工夫をしました。

A large-scale artwork featuring a white, textured sculpture of a dragon or mythical creature on a red wall, with a small figure standing nearby.

企画展示室へ続くロビーの様子

新聞王——黒岩涙香

高橋 正



安芸市川北の涙香の生家(一部改築)。
中二階、櫻子窓の勉強部屋はそのままである。

涙香・黒岩周六(一八六二—一九一〇)は高知県安芸市川北出身。典型的な土佐人気質、反骨の熱血漢であった。殆ど独学で抜群の英語力を身につけ、洋書を乱読、生涯の糧となつた。

新聞『萬朝報』を創刊する一方、『噫情』『巖窟王』『鉄仮面』など翻案探偵小説の作家として、読書界に旋風を巻き起こした。

涙香は日本一の新聞を作ろうと戦略を練つた。「すべて新聞社の競争は低い所から来るのが恐ろしい。一番安く、誰でも読まねばならぬやうな新聞を出さう」と。

涙香は日本一の新聞を作ろうと戦略を練つた。「すべて新聞社の競争は低い所から来のが恐ろしい。一番安く、誰でも読まねばならぬやうな新聞を出さう」と。

(高知高専名誉教授)

涙香・黒岩周六(一八六二—一九一〇)は高知県安芸市川北出身。典型的な土佐人気質、反骨の熱血漢であった。殆ど独学で抜群の英語力を身につけ、洋書を乱読、生涯の糧となつた。

新聞『萬朝報』を創刊する一方、『噫情』『巖窟王』『鉄仮面』など翻案探偵小説の作家として、読書界に旋風を巻き起こした。

涙香は日本一の新聞を作ろうと戦略を練つた。「すべて新聞社の競争は低い所から来のが恐ろしい。一番安く、誰でも読まねばならぬやうな新聞を出さう」と。

涙香は日本一の新聞を作ろうと戦略を練つた。「すべて新聞社の競争は低い所から来のが恐ろしい。一番安く、誰でも読まねばならぬやうな新聞を出さう」と。

堺利彦、内藤湖南、茅原華山ら錚々たる論客を招き、金玉の文を競わせた。趣味・娯楽記事も満載。

日露戦争の風雲急を告げるころ、内村、堺、幸徳秋水らは盛んに非戦論を唱え、主戦論に転じた社主・涙香と袂を分かつた。その「退社の辞」、「送別の辭」は天下青年の喝采を浴びた。

その後、糸余曲折はあつたが、涙香は大衆心理を読み、いいにも悪いにも、今日のジャーナリズムの原型、潮流を作つた先駆者と言える。

涙香は日本一の新聞を作ろうと戦略を練つた。「すべて新聞社の競争は低い所から来のが恐ろしい。一番安く、誰でも読まねばならぬやうな新聞を出さう」と。

涙香は日本一の新聞を作ろうと戦略を練つた。「すべて新聞社の競争は低い所から来のが恐ろしい。一番安く、誰でも読まねばならぬやうな新聞を出さう」と。

『大原富枝 年譜』
山下伸男著刊
令和2(2020)年1月27日
169頁 A5版
山下伸男氏寄贈



資料受贈報告

寄贈資料から

- ▼高知人文社会科学会・「高知人文社会科学研究」7号 高知人文社会科学院編刊
- ▼福本明美「詩集日没」 福本明美著
- ▼筒井泉「電磁場の発明と量子の発見」 筒井泉著
- ▼細川光洋「国際関係・比較文化研究」 細川光洋著
- ▼香日ゆら「漱石書簡署名宛名一覧」 香日ゆら著
- ▼寺内敏夫「大岡昇平「天誅組」原稿(一部)」 寺内敏夫著
- ▼瀬川智子「宮尾登美子原作 NHK ドラマ」「絃の琴」関係資料
- ▼18卷1号抜刷 吉井勇の戦中疎開日記(下)――「續北陸日記」抄2 細川光洋著
- ▼「国際関係・比較文化研究」係学部刊
- ▼「高知人文社会科学院編刊」

涙香は経営が軌道に乗ると、巧妙にも人身攻撃をやめ、内村鑑三、大原富枝は87歳でこの世を去りますが、死の間際まで用紙を求めるべッドに横になつたまま執筆を続け、文学に情熱を捧げた生涯でした。

だが、涙香は経営が軌道に乗ると、巧妙にも人身攻撃をやめ、内村鑑三、

受贈報告 (令和2年2月~4月)敬称略

▼寺内敏夫「大岡昇平「天誅組」原稿(一部)」
▼瀬川智子「宮尾登美子原作 NHK ドラマ」「絃の琴」関係資料
▼香日ゆら「漱石書簡署名宛名一覧」
▼細川光洋「国際関係・比較文化研究」
▼筒井泉「電磁場の発明と量子の発見」
▼福本明美「詩集日没」

18卷1号抜刷 吉井勇の戦中疎開日記(下)――「續北陸日記」抄2 細川光洋著

「国際関係・比較文化研究」係学部刊

「高知人文社会科学院編刊」

福本明美著

筒井泉著

細川光洋著

香日ゆら著

寺内敏夫著

瀬川智子著

福本明美著

筒井泉著

文学マイスター講座

令和2年度

お知らせ



|テーマ| 高知とスポーツ 毎月第4土曜日 14:00~15:30 ※9月~12月はお休みです。

6月27日

「民族の祭典」としてのベルリンオリンピック

第3回

講師 土屋 京子 先生(高知大学准教授)

7月25日

田中英光と1932年
ロサンゼルスオリンピック競技大会出場の選手(仮)

第4回

講師 中村 哲也 先生(高知大学准教授)

8月22日

隆一オリンピックばなし
ー福ちゃんのオリンピックー

第5回

講師 田所 菜穂子 先生(横山隆一記念まんが館館長)

令和3年1月23日

野球の歴史と清岡卓行

第6回

講師 井上 裕太 先生(公益財団法人野球殿堂博物館学芸員)

令和3年2月27日

貴族・武士のスポーツ(仮)

第7回

講師 石畠 匠基 先生(高知県立歴史民俗資料館学芸員)

令和3年3月27日

土佐の江戸期・庶民たちのスポーツ(仮)

第8回

講師 石畠 匠基 先生(高知県立歴史民俗資料館学芸員)

展示入れ替えのご案内

宮尾文学の世界室では、今年度から「宮尾登美子の軌跡～直木賞作家として～」と題し、「直木賞まで」「『絃の琴』の創作」「直木賞受賞とその後」宮尾さんの愛したものたち「自伝四部作の世界」の5つのテーマで紹介。習作原稿や創作ノートなどの展示を通して、直木賞受賞作『絃の琴』の創作過程に深く迫る展示となっています。

「権」以降、「岩伍覚え書」「陽暉樓」「寒椿」など、宮尾さんは、生家の家業である芸妓娼妓紹介業にまつわる女性たちを描くことを命題に、身を切る覚悟で作品を紡いできました。

その一方で、丹念な取材の上にたつ、一絃琴を核とした幕末から昭和へとつながる土佐の女の大河小説ともいうべき作品『絃の琴』を、十七年の歳月をかけ執筆しました。

『絃の琴』は五度書き直したといい、当館には四種類の習作原稿が収蔵されています。そのうちの一つは、日記の記載から昭和43年11月9日に書き上げたものと考えられます。この原稿は弟子である女性の一人語りで話が進行しており、上梓された作品とは筋立てや文体がかなり異なります。すでに大作『絃の琴』の原型をみることができます。この原稿から十年後、幾度もの推敲をへて、書き下し長篇『絃の琴』

は完成しました。

昭和54(1979)年、「絃の琴」で第80回直木賞受賞。それまでの作品とは違い、同じ土佐の女性でも、生家にまつわる女性ではなく、絃琴演奏者の女性を描いた「芸道もの」という、宮尾文学の新たな方向性を示す作品であったことは興味深いことです。

以後、宮尾さんの作品は『伽羅の香』序の舞『松風の家』など芸道ものへと発展しさらに多くの読者を惹きつけてゆきました。



展示の様子

では作家・宇野千代作の桜横様の訪問着やハンドバッグ、珊瑚の帯留など、宮尾さんのご遺族からご寄贈いただいた愛用の品々を展示。また、亡くなるまで大切に身につけていたという愛用の腕時計も今回特別にお借りすることができました。愛用の着物や愛用の品々は1~2か月に一度展示入れ替えを予定しています。ぜひ何度もご来館ください。(展示期間:令和3年3月26日(金)まで)

(学芸課/岡本美和)

宮尾文学の世界室

・
ショッピング
より

今年も紫陽花が美しい季節となりました。雨に濡れて咲く花は青、紫、ピンクがふんわりと混ざり合い、雨の日は霞がかったような空気の中でも幻想的です。とはいえたまえ。そんなゆつたりとした時間に手紙を書いてみるのはいかがでしょう。

最近ではメール等が主流の連絡方法となり手紙を送る機会が減ってしましましたが、やはり直筆の手紙は受け取る側もとても嬉しいものです。

当館ミュージアムショップで人気の花はがきは、身近な自然のうつろいが表現されていて季節のお便りにぴったりです。草花舎の花はがきは季節の花々の瑞々しさをやわらかい水彩画で繊細に描いており、芸艸堂の花版画シリーズは大胆に四季折々の花々がデザインされて印象的な絵葉書です。

相手にお花をプレゼントするような気持ちで絵葉書も選んでみてはいかがでしょうか。

文学館にお立ち寄りの際は、是非ミュージアムショップもご覧ください。
(総務事業課／高塚佐矢子)



ショッピングより絵葉書

館長エッセイ

常設展の作家たち
「春は憂鬱だ」と言った作家がいる。

しかし、今年の春は、新型コロナウイルスが瞬く間に世界を席巻し、私たちの当たり前になっていた日常をいともたやすく壊そうとしているのを見れば、憂鬱よりもむしろ不安をもたらしているのではないかと思ってしまう。

当館でも、夢にあふれた春の企画展をやむなく中止することとなつた。残念の一言に尽きる。さらに、感染拡大防止のため長期間にわたる臨時休館となつた。

館内の様子は、とて、常設展と企画コーナーがその存在感を示している。そうだこんな時だからこそ、常設展の作家たちと丁寧な語らいをしようと思い立つた。誰もいない静寂の中、時間だけが過ぎていく。まっすぐ向き合い、作家一人一人の作品や展示資料を眺めると、ゆっくりと、その苦難に満ちた生涯と、強靭で搖るぎない

思いが伝わってくる。

例えば、極貧の中でも情熱を失わず万葉集を研究し続けた鹿持雅澄(＊)、常に病におびえながら

も病と向き合う中で作品を綴った大原富枝や上林暁など。確実に過ぎいく時間のなかで、すべては、自分にとって「学ぶ」「書く」ということの意味を日々問い合わせたのではないだろうか。

その足跡が作家の作品となつて、私たちに今、語りかけてくる。人生とは日常の積み重ねなのだと、いうことに、あらためて気付かされた思いがする。

*現在は展示撤去中

(岡崎順子)

新職員の紹介

たくさんの方々に文学の魅力を知っていただくこと、もう一度訪れたい!と思っていたことを目標に頑張りたいと思います。

学芸課 大西あゆみ

文学館で高知の文学者たちの思いにふれ、文学への関心を深め、毎日を有意義に送ってまいりたいと思います。

総務事業課 海治紫野



